

大学（生）は大学（生）らしく

—Change Syndrome「変更症候群」の提示—

菅野 憲司

千葉大学文学部

はじめに

本研究発表では、具体的事例を挙げて、主題である「大学は大学らしく」かつ「大学生は大学生らしく」を主張し、この事例が Change Syndrome「変更症候群」の現象であることを提示して、この症候群の克服を考察する。

1. ある事例

関西で国際化を理念とするとある大学が、日本の大学ではじめての試みと称して、キャンパス・マイレージなる制度を創設なされた。「成績でポイントため海外旅行」というキャッチフレーズは、テレビのコマーシャル等でお馴染みの各種学校「…」を連想させ、昔（今も？）大学受験時代の通信添削で高順位に与えられるポイントで景品を交換したのを思い出した。

2. 大学（生）は大学（生）らしく

成績でポイントため海外旅行、いかにも学生らの考案で、学生との議論がきっかけというのはご立派である。しかし、成績をポイント換算するのは奨学金支給選考等のための手段であって、成績ポイントが海外旅行のための目的であろうか、学内の声「即物的」とは言い得ていよう。また、ボランティア活動をキャンパス・マイレージのポイントにするのも如何なものか。見返りを求めないからボランティア活動なのであり、このボランティア活動がポイント対象になると、せっかくの内発的動機付けがかえって実現されないことになりはしないだろうか。大学（生）とは、priceless や invaluable の何たるかを知り、それこそを目標にしていくべきではないか、まさしく大学（生）は大学（生）らしくである。

3. Change Syndrome「変更症候群」

キャンパス・マイレージの事例等は、次に当てはまる現象である。

Change Syndrome「変更症候群」： 生き残りや結果を出す等々を理由に、change 変更そのものが（無）意識的に自己目的化した現状

定員割れが心配になればなるほど、生き残らねばとか結果を出さなければ等々と思い、change 変更そのものが意識的にしろ無意識的にしろ自己目的化したのが今現在日本の大学における状況であり、キャンパス・マイレージもこの Change Syndrome 「変更症候群」に良く当てはまっていると言えよう。

4. Inchange Syndrome 「無変化症候群」

Change Syndrome 「変更症候群」は決して旧くはない、10年と経過していない大学教育（当時、一般教育？）学会シンポジウム部会の司会が次のようにまとめている位だからである。

日本で大学改革が進まないのは、一流を自覚する大学は変更しなくても一流と思い、非一流と自覚する大学は変更したって非一流と思っているからである。

これを言わば Inchange Syndrome 「無変更症候群」として次のようにまとめることができる。

Inchange Syndrome 「無変更症候群」： 自己認識が一流であろうがなかろうが、change 変更に関心に取り組もうとはしなかった一昔前の状況

上記両症候群を比較すると、日本の大学における状況は、Inchange Syndrome 「無変更症候群」が反転して Change Syndrome 「変更症候群」になったことがわかる。

5. 両症候群の超克

両症候群は、変更に関して、拒食症と過食症を連想させる。拒食症も過食症も摂食障害でまとめられるように、適切な摂食はこの両者の中間であろう、同様に変更に関する両症候群の超克も両者の中間と考えられよう。

本当に必要な変更にのみ努力が傾けられるべきであることは言うまでもなく、効果が変わらぬ変更は避け、掲げる理念に反するかのよう日本大学に対する国際的評価の低下を招きかねないキャンパス・マイレージのような不適切な変更は廃されてしかるべきである。

〔2004年12月7日〕

(かんのけんじ・kkanno2004@hotmail.com)